

ボランティア情報



～つながる、広がる、福祉教育～

福祉教育 わたしたちの実践

鹿児島県 南大隅町社会福祉協議会 地域福祉係長 おおたけの ゆうすけ 大竹野 佑介さん



【社会福祉法人が運営する居場所を福祉教育実践の場に】

鹿児島県南大隅町は、県内で最も高齢化が進み、高齢化率は50%を超えています。こうした地域課題を踏まえ、南大隅町社会福祉協議会（以下、町社協）は、福祉教育の一環として小学校で高齢者体験を実施していましたが、コロナ禍で中断し、学校と地域の関係が希薄になっていました。そこで町社協の大竹野さんは、福祉教育の再開に向け、教員経験のある県社協の福祉教育推進員（以下、推進員）に協力を依頼。町立小学校、町社協、そして地元で介護予防や地域交流等を目的とした居場所「茶のん家」「来やん家」を運営している社会福祉法人が連携し、2022年度から小学4年生を対象に新たなプログラムを開始しました。

学校や法人との連携において非常に心強かったのが推進員の存在です。推進員は学校長や法人理事長と面識があ

り、町社協とのつながりを築いてくれました。また、「教育指導案を参考にした福祉教育の内容を提示する」「授業後に先生と打ち合わせを行う」などの具体的な助言も受け、大竹野さんは、子どもたちが使用している教科書も参考にしながらプログラムを作成しています。

初年度は4年生を対象にしましたが、翌年度からは3～6年生まで拡大し、合計30時間、バリアフリーやユニバーサルデザインに関する学習や、「障がい者の理解とふれあい」をテーマにした知的障害者施設との交流など多様な取り組みを実施しています。4年生は地域課題を踏まえ、高齢者との交流や2025年問題がテーマです。まず高齢者をゲスト講師として招き、講演やグループトークを実施。この際、昔遊びを一緒に楽しむことで

親しみを深め、高齢者の気持ちや要望を聞きます。そして、聞き取った内容をもとに、高齢者と仲良くなれる活動を子どもたちと先生で話し合い、「茶のん家」「来やん家」で実践します。

大竹野さんは次のように語ります。「福祉教育は『教えなくちゃ』ではなく、子どもたちと一緒に考える視点が大切です。子どもの気づきや学びを信じ、地域の人がそれぞれの役割で福祉学習を実践できているように思います。地域資源を子どもや保護者、学校の先生に知ってもらえる機会にもなっています」。

6年生は、3年間積み重ねてきた福祉教育の集大成となる学年です。今年は、学校の外で子どもたちの気づきや想いを発表する機会を設ける計画が進められています。町社協は、福祉教育を継続していくため、中学校や高校との連携も検討しています。

Contents

- P.2 ▶ **特集** 輪島の声聴く ～地域で生きるごちゃまるクリニック～
- P.6 ▶ わたしにとってのボランティア
- P.7 ▶ 「聴くこと、伝えること」を考える
- P.8 ▶ 地域支え合いセンターってどんなところ？ | インフォメーション

特集

輪島の声を聴く

～地域で生きる ごちゃまるクリニック～

能登半島地震から1年が経ちました。2024年9月には奥能登豪雨災害と、二重災害に見舞われた輪島市。そこに、「ごちゃまぜまるごとの支えあい、あなたらしく日々を過ごすことを応援する」をモットーに掲げて、以前からさまざまな地域活動に取り組むふたりの医師がいます。地域住民たちとの関わりのなかで、ふたりが何を思い、考え、行動してきたのか。本特集は、そうした「輪島の声」を率直に聴くことで、私たちが考える地域づくりや被災地支援の枠組み、ボランティア活動やボランティアコーディネート等に対する認識を自ら問い直すきっかけとします。

インタビュープロフィール



こうら ともゆき
小浦 友行さん

石川県出身。富山大学卒業後、総合診療科や救命救急センターで医療に携わった後、生まれ育った能登に戻って2022年12月に「ごちゃまるクリニック」を開設。日本プライマリ・ケア連合学会 認定医・指導医、日本内科学会 総合内科専門医、日本医師会 認定産業医、石川県認知症サポート医、剣道4段。

こうら うた
小浦 詩さん

大分県出身。富山県で小児科医として約十年勤め、2017年に家族とともに石川県へ。自ら子育てに奮闘しつつ、家や学校でもない第三の居場所「わじまティーンラボ」を運営するなど、輪島に育つ子どもたちの成長を応援。日本プライマリ・ケア連合学会 認定医・指導医、日本小児科学会 小児科専門医、特定非営利活動法人じゅくらあと理事長。

総合診療の枠に収まらない クリニックの立ち上げの原点は 地域共生社会的な取り組み

能登半島地震と奥能登豪雨災害。立て続けに大禍に見舞われた街、輪島。朝市通りへ出ると荒廃した風景が容赦なく広がります。小浦友行さんが生まれ育った故郷は今、ともすればそこにルーツをもつ人たちの望郷の念もるとも沈みゆく危うさのなかにあります。

友行さんと詩さん夫妻が中心となって運営する「ごちゃまるクリニック」は、2022年12月に開設されました。友行さん、詩さんふたりの医師に加え、4人の看護師、助産師、作業療法士、3人の医療事務員がそれぞれの専門性と個性を活かしながら、総合診療の新しい姿を手繰り寄せようとしています。

ごちゃまるクリニックの成り立ちは、友行さんが勤務医時代に直面した経験が礎になっています。

「私は石川県輪島市で生まれ育ちましたが、富山大学出身で人生の半分ぐ

らいは富山で過ごしていました。その時に保健師や社協、民生委員の皆さんと一緒に、街づくりというか、地域共生社会的な取り組みに携わらせてもらう機会がありました。その手応えが発点のひとつになっています」

友行さんは、当時のことを振り返ります。

「当時は勤務医（病院に勤める医者）こそ地域のよるずの医療ニーズに応えられる立ち位置だと信じていました。勤務医で一生を終えようと思い、救急、入院患者さんの対応、外来、診療所、在宅医療、いろんなところで手を出す働き方をしていました。そうして病院に勤務しながら、いつしか圧倒的な力不足を感じるようになっていました。救急医療の現場で、いわゆる下流と表現される、病気の起こるプロセスの最終段階に医療が登場することにもどかしさを感じたのです。孤独を癒すために救急車を呼び、運ばれてくるお年寄りなどと話すにつれ、社会の矛盾が原因となって病気になる、医療が必要な

状況になる前にもっと上流の部分で、社会が抱える課題に対して関わっていきたくて考えるようになりました」

ある種の無力感を抱いていた友行さんの契機になったのは、2014年、師と慕う富山大学総合診療部教授から富山市での市民向け講座の担当を薦められたことにあります。テーマは都市型の地域包括ケア。恩師が、行政と連携しながら地域に分け入って地域共生社会に取り組んでいるのを見ていた友行さんにとっては渡りに船。大学病院での救急医療との掛け持ちで、富山市内の保健センターの一室に机を与えられることになりました。

地域共生社会へのカギは 異なる立場から学び合う 多職種連携教育・多職種連携実践

保健センターの保健師と連携しながら家庭訪問などを繰り返しているうち、「この医者使えるな、言えばどうにかしてくれる、ある程度の成果を出し

助成金情報

(公財)三菱財団 「2025年度 社会福祉事業並びに研究助成」(2025年1月17日締切)

国の福祉の向上に資することを目的に、現場における社会福祉に関する事業/活動および社会福祉に関する科学的調査研究を幅広く支援します。(詳細は「三菱財団」で検索)

てくる」といったところまで信頼を積み重ねることができました。結果、その保健師たちと強力なパートナーシップを築くことができたのです。

異なる立場から人として学び合う、学び合いから始めることをテーマにした事業を、友行さんたちが立ち上げたのも、今から10年前のちょうどこの時期。学生、実務者、学校の先生などが混ざり合って学ぶ「多職種連携教育・多職種連携実践」です。

この「多職種連携」がターニングポイントになったと友行さんは言います。「地域のさまざまな人たちと一緒にあって、地域共生社会的にアパートの一人暮らし問題を考えたり、地域のショッピングモールを盛り上げるためにはどうすればいいのか、町内のキーパーソン同士の不仲をどうすればいいのか……」

友行さん曰く、これらの考察と実践こそ学び合いの多職種連携教育・多職種連携実践であり、同時に、人々の健康や病気が、社会的、経済的、政治的、環境的な条件によって影響を受けるといふ、健康の社会的決定要因（Social determinants of health）を肌で感じていたこととなります。地域にアウトリーチしていくなかで、ある社協職員が友行さんにこう言いました。

「先生、これからの時代は（部分最適化にとらわれない）『まるごと』ですよ！」

このひと言が、地元の輪島市に戻り、総合診療クリニックの開設へと大きく舵を切るきっかけとなりました。新型コロナウイルス感染症の流行で命を守ることばかりが叫ばれるなかで、本来、命と同じくらい大切なものが蔑ろにされているのでは……と疑問を感じていたことも後押しになりました。

「ごちゃまるクリニック」の誕生です。

「ごちゃまぜ」にして「まるごと」生活全体をまるごととらえる「全体最適」をめざすこと

ごちゃまるクリニックのユニークなネーミングは、「ごちゃまぜ」にし

て「まるごと」であることに由来。開設までに至った思いが込められたものとなっています。まず、ごちゃまぜとは、それぞれの持ち味を活かした相互作用を意味します。さまざまな職種や事業、そして公私の境目なく相互に応援しあって、地域共生社会を実現しようというものです。

その相互作用の連鎖のなかに、自ら診療所として存在しながら、医療はもちろん介護や福祉、心地よい居場所を提供。一般的な診療所のイメージに取まらない、文字通り多職種連携を実践するものとなっています。

次に、まるごとが意味するのは、部分最適ではなく全体最適をめざすこと。

医療はもちろん福祉においても、つい得意分野を中心に支援を考えがち。症状や疾病だけを見るのではなく、その人の生活全体をまるごととらえる姿勢を示すものです。また、本人に加えてその家族、取り巻く社会や地域、風土、文化まで対象とすることで、健康を社会的決定要因から見つめ直そうとするものです。

集まったスタッフも「患者と深く関わりたい」と、ごちゃまるクリニックの考え方や活動に共感した人たち。それぞれの専門性を大切にしながら、一地域住民としての個性も重要視することが、ごちゃまるクリニックらしさのひとつになっています。

「例えば医療事務の職員にしても、ご近所のお母さんという感じで、待合室にいる人にどんどん話しかけるんです。その会話から診察室では語られなかった生活が見えてくることもあります。また、事務職員がアイデアを出して震災の避難所や仮設住宅でお茶会やフラワーアレンジメント教室をやったり、学校でビーズを使った工作を教えたり……」と、活動のごちゃまぜ、まるごとの様子を友行さんは語ります。

10代の子どもの安心な居場所を提供人と出会う機会を多彩にするわじまティーンラボ

このような多彩な活動を構成するも

のとして、ごちゃまるクリニックのある建物の2階と3階には「わじまティーンラボ」があります。ティーンラボは、輪島の10代の子どもたちが安心、安全に過ごせる場所を提供するための取り組みです。

友行さんの良き理解者であり、パートナーである詩さんは、大学を卒業後、富山で小児科医として働いていました。また、学校医を務めてきた経歴もあります。

「当時から不登校児に対応しつつ、病院の外来で慢性的な腹痛や頭痛を抱えている児童に接していると、病院でもない、学校でもない、地域の子どもが健やかに過ごせる第三の場所を提供したいと思うようになりました」と振り返ります。その思いを具現化したティーンラボでも、ごちゃまぜであることがプラスに作用しています。

「ティーンラボに来て開くの待っている小学生が、診療所の待合室で涼んでいると、周りにいる大人と何気なく話すことがあります。子どもと接することで大人が元気になるし、子どもにとってはいろんな人と関わりをもつ機会になります。抱えている問題が一個人のことだけでなく、家族であったり、その地域であったり全てが連続して作用しています。見る人によって見え方が違うように、出会いを多彩にすることは、人を点ではなく線だったり面でとらえられる機会を増やすためにも大切。いろんな人がいろんな場で出会える取り組みが不可欠です」と、詩さんはティーンラボの存在意義がますます高まっていることを実感しています。

詩さんは、子ども同士のつながりにも注目します。

「現在、一時的に小学生を受け入れていませんが、基本的に小学4年生から高校3年生までラボを利用できます。小さいコミュニティということもあって、輪島の子どもたちは学年を超えて仲良くなりやすい傾向がありますが、兄弟が多いことも影響しているのですが、学年に関係なく仲良しになっています。そのきっかけづくりとし



クリニックの待合室で地域の赤ちゃんをあやす高校生（2023年8月撮影）



震災後に再開したわじまティーンラボに集う中高生たち（2024年4月撮影）

て、年に一度フェスを開催したり、企画と一緒に考え、実行してもらうことで、より仲が深まっている感触があります」

また、高校生が学校の活動として、お花を使ったカフェをやってみたいということもありました。

「華道の免状をもっているスタッフが一緒になって企画を練るところから伴走して、ティーンラボで実践の機会をつくったり。そういった活動を通じて、子どもたちの探求心を応援する場所にもなっている」と詩さんは感じています。

やっと震災を乗り越えたと 思った矢先の豪雨災害 それでも 子どもたちは日常に戻りつつある

詩さんは震災前後の様子を次のように振り返ります。「わじまティーンラボを改築しリニューアルオープンしたのが2023年12月24日。発災一週間前でした。来年は新しくなったこの場所で、楽しいことができるぞとワクワクしながら、みんなで希望にあふれた年明けを迎えるはずでした」

友行さんが言葉をつなぎます。「能登半島地震で人生変わったっていうのはその通りです。当時、メディアに取り上げられた自分の様子を客観的に見ると、すごく感傷的になったり、情熱的になったり。アドレナリンを出しながら、この地域を何とかしようと頑張っている様子がうかがえました。それが、ようやくクリニック復旧の道筋が見えてきて、経理的にも立て直せると思った矢先、豪雨による被害で、心がポッキリ折れたような音が聞こえま

した」。やっと震災を乗り越えたと思ったところへ、完全にゼロスタートになってしまったのですから無理ありません。今（取材時点2024年11月18日）もクリニックは復旧の目処が立っておらず、使い物にならないのが実状です」。

ティーンラボについては、「子どもたちが怖がっているとか、すごく落ち込んでるっていう姿はあまり見ません。わりと元気に楽しく、むしろイザコザですとか、ちょっと仲違いをする日常も戻りつつあります。もちろん震災の前後に関わらず、悩みや不調を訴える子はいます。また、3～5月は自衛隊のお風呂に通っていた子どもたちがいて、今までなら6時までラボにいられたけれど、お風呂の時間があるから4時過ぎには帰らなければならぬとか、仮設住宅が遠くなったからラボに来にくくなったとか、そういう不都合な日常の場面はあります。一方で、すごく悲しいとか、悩みが増えたという感覚は正直ありません」とのこと。

災害によってトラウマを得て より強くたくましくなる 災害後成長を目の当たりにする

そうしたなか、気づいたこともあります。

「『災害後成長』という概念があるらしいんです。トラウマを得て、人はより強くたくましくなるという現象。これはポスト・トラウマティック・グロースというらしく、災害の後に成長する人の方が多いというのを、震災のメンタルケアの専門家から教えてもらいま

した。このことが目からうろこということか、子どもたちもそうですが、患者さんたちからもそういった面を見せられることがありました。たくましくなっている人たちが実際のところ出てきたんですね。」

これはいったい何だろうと自問します。

『単なる痩せ我慢では？』とか、『自分がひいき目に見ているのでは？』とも思いました。『いや、これは一般論として震災後に起こることです』と言われたときに、あ、これがそうなんだと。まさしく自分自身もそうなんだと気づかされました」

地域住民の発想力や自己回復力 子どもたちの「しなやかさ」 新たな活動への意欲に

「心が折れても、人への関心や、亡くなってしまった方への弔いの気持ちで原動力になっています」と友行さん。ごちゃまるクリニックの仲間の受援力や活動を軌道に乗せる力は強まり、課題解決のスピードも速くなったと感じています。もちろん以前に比べれば、情熱や信念が湧き上がる瞬間が少なくなっていることは否めません。それでも「この物語の続きが見たい」という思いも、活動を支える原動力に推進力を加えます。

同時に「地域の住民に目を向けると、生活のなかに困難や変化があっても日常を送り続けている」ことに気づかされたともいいます。

「クリニックの仲間や地域住民がみせる発想力や自己回復力に常に驚かされます。とくに子どもたち。その姿から『人のしなやかさ』や柔軟さを学んでいます」とも。

「ある日、豪雨災害で泥まみれになったクリニックを、子どもたちが歌を唄いながら掃除してくれていました。彼らが帰った後に、ふと壁を見たら「ローストビーフ食べたい」と落書きしてあったんです。『僕たちも早くここを使いたいから』と、困難な状況でも、子どもたちは自分なりの工夫や遊び心を忘れずに生き抜いています。そのた



豪雨災害後初めて足を踏み入れたクリニックの1階は水没していた（2024年9月）

くましさに触れることで、私たちの活動への意欲も新たにされる思いでした」と友行さんは振り返ります。

さまざまな出会いから生まれた 想定外のつながりと 「助けて」と言える受援力の高まり

また、2度の災害から思わぬ波及効果もありました。

「困難な状況にあっても、さまざまな出会いから想定外のつながりが生まれました。遠方の支援者やミュージシャンたちが活動に関わるようになり、それによって視野が広がりました」と友行さん。多様な価値観に触れることで、活動に対する新たな発想も生まれたといいます。

もうひとつ、地震の後と、豪雨の後とでは変わったことがあります。

「臆することなく『助けて』と言えるようになりました。能登半島地震のときは、なかなかパツと言えなかったのですが、奥能登豪雨災害では『もう無理なんです、助けてください、お願いします』と大きな声で言うようになりました。それが受援力の高まりと言っているのかわかりませんが、図らずも、ふたつの災害を経験した違いではあると思います」

医師や医療の現場は人を助ける立場という固定観念があります。それに縛られず、人に助けを求められる自分自身を受け入れることは、支え・支えられる地域共生社会の姿を映し出しているようにも見えます。

「地域の人々との関わりのなかで、これからも未来へ向かう力を育てていきたいと考えています」と友行さんと詩さんは、再び前を向いています。



震災後の復興を祈った輪島大祭の巨大灯籠「キリコ」（2024年8月撮影）

取材担当者のコメント

今回の取材を担当した全国社会福祉協議会全国ボランティア・市民活動振興センター広報委員会委員のおふたりに、インタビューの感想を伺いました。読者の皆さんは、小浦友行さん、詩さんのお話から、何を感じ、考えましたか。みなさんの想いを、ぜひ、周りの方々と共有し、さらに考えを深めてみてください。

社会福祉法人立川市社会福祉協議会 ボランティア・市民活動センターたちかわ こばやし のぶまさ 小林 伸匡さん

医師という職業柄、生と死に日常的に関わっておられるからこそ、コロナ禍で命と同じくらい大切なものが蔑ろにされていないかという問題意識につながったのではないかと感じました。人の命も暮らしも、生まれてから死ぬまで連続していて、単純に一部分だけを切り取ることは困難です。ボランティア相談においても、どのような経緯で、なぜ相談に至ったのか、そこには必ず連続してきた過程（＝人生）があるはずで、そこを無視してはコーディネーターも上手くいきません。予期せぬ2度の被災を経て、さすがに心が折れ、それでもひたむきに地域と向き合い続けるふたりの姿から、皆さんは何を感じましたか？ 私は、ボランティアコーディネーターという立場以前に、ひとりの人間として「あなたはどう生きていきたいのか」という問いを突きつけられたような気がしています。

社会福祉法人黒部市社会福祉協議会 くるべボランティアセンター こまだ しょうこ 駒田 祥子さん

ごちゃまるクリニックは、医療の枠を越えてさまざまな職種や事業などが、「ごちゃまぜ」で「まるごと」相互に作用することで、地域共生社会の実現をめざしておられます。この「ごちゃまる」こそが、新たなものを次々と創り出す力となり、地域で共生の輪を広げているのだと感じました。「人を助ける立場という固定観念に縛られない」という小浦さんの姿勢から、福祉においても大事な視点に気づかされます。専門職としての立場だけではなく、住民としての視点を大切に、枠にとらわれず多様な価値観を取り入れていくこと。これらは、ボランティアコーディネーターとしても大切なことだと思います。今年の干支の巳は、変化や再生を意味するそうです。これまでの枠にとらわれず、新たな自分を生み出す一年にできればと思います。

助成金情報

（公財）さわやか福祉財団 「地域助け合い基金」（随時募集）

地域で暮らす人同士の助け合い活動（つながりづくりを目的とした居場所や地域活動を含みます）を対象とし、助け合い活動の開始、維持、発展のため具体的に必要とする額を支援します。（詳細は「さわやか福祉財団」で検索）

わたしにとってのボランティア

次世代によるボランティアのいま

若者によるボランティア・市民活動は、若者の視点や感性、若者だからこそできることを活かしながら広がりを見せています。こうした若者の活動や思いを紹介することで、若者たちにとって「ボランティア」とは何か、さらに社協 VC が若者とつながる地域づくりを考えるきっかけを提供します。



岐阜協立大学看護学部看護学科
2年生
かとう ももえ
加藤 百恵さん

第22回 岐阜県 ボランティアサークル

団体紹介

発足当初は看護学部の学生で構成され、救護ボランティアを中心に活動を開始。その後、他学部の学生もメンバーに加わり、名称を「ボランティアサークル」に変更。メインとなるのは看護学部の学生で、現在約60名が所属する。

「ありがとう」と言われたうれしさを忘れない さまざまな活動に主体的に取り組む

看護師をめざす加藤さんが ボランティア活動をする理由は？

幼い頃に入院し看護師さんが優しく接してくれた経験から、医療の世界に憧れるようになりました。「人の役に立てる」という点が医療と通ずると思ひ、中学生の時、地元の夏祭りにボランティアとして参加し、楽しさや面白さを感じました。

大学に進学し、友人の紹介でボランティアサークルに加入しました。サークル宛での募集に応じて、岐阜馬拉ソンや大垣馬拉ソンに救護ボランティアとしてこれまでに3回参加しました。倒れた人がいないか常に周囲に注意を払うことに加え、救護する側の体調管理も重要だと学びました。

また、大垣市民病院の災害訓練に、患者役として参加しました。設定された病気やけがを理解し、リアルに行動するよう努めました。また、トリアージタグの情報から意識レベルも含めてその患者になりきるよう心がけました。

ほかにも献血活動や赤い羽根共同募金への協力などを行っています。

依頼を受けての活動だけでなく 自発的な活動もしているそうですね？

2023年の「水都まつり」で、新潟の長岡大学と一緒に特産品の販売や募

金活動を行いました。長岡大学は学生主体で活動しており、その姿勢に触発され、私たちのサークルのメンバーの主体性も高まりました。そして、能登半島地震の後には、先輩の提案をきっかけに自分たちで考えて作った募金箱を大学に設置しました。

私自身の変化もあります。ボランティア活動を始めた当初は、誰かと一緒に活動はやりやすくても、自分が率先して活動することは苦手だと思っていました。しかし、今では「ひとりでも、やりたいことは今やらないといけない！」と考えるようになりました。サークルを通じたボランティア活動だけでなく、大学の新生をサポートするなどの小規模なボランティア活動も始めました。

自発的に活動することで どのような変化が生まれましたか？

これまでは顧問の先生が連絡役を担っていましたが、学生が関係機関と直接連絡を取ることで、新たな活動の機会が増えてきたと思います。また、接する機会が増えることでボランティア活動に参加しやすくなり、お互いの距離が縮まり、壁がなくなると考えています。

ボランティア活動を続けるうえで最も大切なことは、自分が楽しいと感じ

ることです。「ありがとう」と言われたときのうれしさは、決して忘れてはいけない感情であり、それがボランティア活動を続ける大きなモチベーションとなっています。これからもサークルメンバーとともに、またサークル外でもさまざまな活動を主体的に続けていきたいと考えています。



大垣馬拉ソンでの救護ボランティア活動に向けたAEDの訓練

ここ、いいね!

中学生の時から参加しているボランティア体験を通じ、加藤さんが「自分の意志で行う活動」を自ずと身につけたことは、たいへん素晴らしいことです。積極的に後輩たちをサポートする姿に感銘を受けます。

出会いや楽しさを感じながら、無理せず、できる範囲で継続的に行ってください。

千葉市社会福祉協議会 地域福祉推進課
ボランティアセンター 副所長

くわの たかてる
栗野 貴輝さん

助成金情報

(一財) サウンドハウスこどものみらい財団 こどもの未来基金 (随時募集)

苦しんでいる子供たちの生活を援助する取り組みを支援します。こどもの命を守る事業の運営に関わり、心と体を癒す居場所づくりに寄与する事業や虐待児の経験をもつ人たちの心のケアに取り組む事業等が対象です。(詳細は「サウンドハウスこどものみらい財団」で検索)

「聴くこと、伝えること」 を考える

第10回

「自分の体験を語る」ということ



福祉ジャーナリスト
まちなが とし お
町永 俊雄さん

この社会をいつも「福祉とは」とか「ボランティアとは」といった大枠から考えるだけでなく、自分に引きつけて考えてみてはどうでしょう。でも、どうすればいいのか戸惑いますね。そこで、誰もが備えている「聴くこと、伝えること」から考えてみます。

「聴くこと、伝えること」を改めてとらえ直す、それはこの社会への新鮮な視点になり、何より自分の発見にもつながるはず。 「聴くこと、伝えること」こそが、あなた自身の確かな福祉力を生み出す、そう思っています。

1947年東京都生まれ。1971年NHK入局。「おはようジャーナル」キャスターとして教育、健康、福祉といった生活に関わる情報番組を担当。2004年からは「福祉ネットワーク」キャスターとして、うつ、認知症、自殺対策などの現代の福祉をテーマに、共生社会のあり方をめぐり各地でシンポジウムを開催。2011年からフリーの福祉ジャーナリストとして活動を続けている。全国社会福祉協議会全国ボランティア・市民活動振興センター運営委員、広報委員も務める。

アナウンサーなどという肩書きをもっていると、なぜか「上手な話し方」について聞かれることがよくあるのですが、実は私自身「上手な話し方」などはない、というのが自論なのです。が、そうは言いながら現役の時には渡世の義理なのか、文化センターの担当者から「マ、そんなこと言わないで、マ、マ」と言いくるめられ、「上手な話し方」の講座をいつの間にかもたされたことがあります。

困ったなあ、そう思いながら、その受講生に聞いてみると、職場でのプレゼンやコミュニケーションに役立てたいという人の一方で、うまく話せないことが、自己肯定感につながらず、自分に自信をもてない人々がいるのです。

そうした人々には、「上手な話し方」をまず頭から追い払ってください。うまいかへたかを気にしないで、まずは自分自身のことを語ってみたらどうでしょうか、と話しかけます。

自分のことだったら誰もが話すことができるはず。ところがやってみると、たいていが履歴書のような自分の長所や短所、希望や夢を語るのですが、どれもありがたりの作文のようで実感がありません。

うーむ、まいったなあ。それなら「自分の体験」を語ってください。どんなことでも結構です。来週までに考えてきてね。「体験を語る」、これは何よりも具体性をもった自分を語ることで

す。翌週は「私の体験を語る」という発表会です。会社でプレゼンで慣れている人は、さすがに如才なく語ります。

次いで、「私は話下手で」と身をすくめるようにした人たちが語り始めます。

ある年輩の女性の「自分の体験」。夫と小さな八百屋を営んでもう何十年になる。店のほかに子育てや家事や雑事もこなし、夫とともに無我夢中だった。客のあしらいはいつも夫で、威勢のよい夫の声の影で、内気な自分はそれでも懸命に暮らしを支え、今は順調に安定している。ある時、何気なく文化センターの「上手な話し方」のチラシを見ていたら、夫は「行ってくるといい」と薦めた。「私は話下手で、迷惑かけているものねえ」、そう言ったら夫は「そんなこと言ってない。お前は自分のやりたいことをやっていい潮時だぞ」とちょっと語気を強めて言った。今、こうして話していて、私はこの私でいいんだということがわかった。いまようやく夫の気持ちが変わったような気がする。彼女はそう語って顔を上げ、誰ともなく「ありがとうございました」と言って晴れやかに語り終えたのです。

ある若い女性は、高校の時仲良しの一人が家族の転勤で遠くに行くことになった。みんなでお別れ会をして、当日は駅までみんなで見送りに行って賑

やかにバンザイまでした。

一人になったの帰り道、あぜ道に日が暮れて、その時彼女は、大人になっていってこんなことなのかと思っただ、と、途切れがちにそう語ります。

「夕焼けが何かいつもと違ってみえたんです。ヘンですけどね」、そんなふうになにかこやかに語り終えようとして、ふっと下を向いて肩を小さく震わせ声を詰まらせた。みんながシンとなって、そしてみんなが小さく温かな拍手を送りました。

「自分の体験」はあなただけのものです。「自分の体験を語る」ということは、実は自分に向かって自分を語っているのです。「体験のなかの自分の声」に自分が耳を傾けると、自分の弱さや強さ、その時の思いをもう一人の自分を見つけ、気づき、そしてそのもう一人の自分が、今の自分を励ますのです。

「上手な話し方」などありません。上手か下手かは、誰かの勝手な価値判断で気にすることではありません。「自分の体験を語る」ことは、あえて言えば、新たな自分の「上手な見つけ方」と言ってもいいのかもしれない。ついでに言えば、とまどい、言いよどみながらの語り口って聴く人を惹きつけます。そこには、聴く人を含んだ普通の「自分」がいるからです。

『月刊福祉』2025年2月号(全社協出版部) 価格 1,170円(本体 1,064円)

書籍紹介

特集は、「地域で活躍する人、福祉への参加を広げよう」。超少子高齢社会は、各地域の持続可能性、そして福祉にも深刻な影響を及ぼしています。そこで、施設や社会福祉協議会などの社会福祉法人ができること、NPOや企業等の多様な組織と関わることで生まれる可能性を示します。

地域支え合いセンター

ってどんなところ？

～立ち上げ時の課題を知る～

災害からの復興がすすむ時期、地域支え合いセンター（以下、センター）は、被災者のサポートと地域づくりを展開します。本連載では、センターを実際に運営した都道府県社協、市町村社協それぞれの経験から、立ち上げの一助となる情報を発信します。

第4回 愛媛県 西予市社会福祉協議会

被災者のニーズを相談員が聞き
支援の格差が起きない様に配慮

宇和支所長（現在）
災害当時は支え合い
センター長
いのうえ あつひと
井上 敦人さん

災害を経験した教訓を活かし、
社協の拠点に機材や非常食を備蓄

平成30（2018）年7月の豪雨は、西予（せいよ）市に甚大な被害をもたらしました。河川の氾濫や土砂災害により道路が寸断され、通常なら20分程度で到着できる場所に1時間以上かかる事態に直面しました。この経験を踏まえ、西予市社会福祉協議会（以下、市社協）では、各拠点に機材や非常食、発電機などを備蓄し、職員が迅速に対応できる体制を整えています。

また、災害ボランティアの育成にも注力しており、愛媛県及び愛媛県社会福祉協議会（以下、県社協）の呼びかけで社協、行政、NPO団体、士業の方々が顔の見える関係性を築く会議に積極的に参加しています。さらに、西予市内では地元の会合や市主催の復興プログラムへの職員参加を奨励しています。

継続支援の意識がスムーズな移行を実現
災害ボランティアセンターから支え合いセンターへ

災害ボランティアセンター（以下、災害VC）は、7月9日から9月30日まで活動しました。その間に、支え合いセンター（以下、センター）を立ち上げる計画が進みましたが、災害VCを閉鎖するのではなく、「看板を架け替えるだけ」というイメージを住民に丁寧に説明しました。私自身、以前から災害VCの機能は災害後も住民を支援し続けるべきだと考えていたため、センターの開設はスムーズに進めることができました。

仮設住宅には約120世帯が入居し、さらに500世帯以上が在宅避難をしていました。加えて、避難指示が出されたことで消防団詰所や保育園が使えなくなっ

た地域もあり、こうした問題を一つひとつ把握して支援に格差が出ないように配慮しました。これらのニーズには9名の職員で対応しましたが、相談を聞くスキルを持つ人材が不足し、また被災時の話を聞く心理的な負担もあって人材確保に苦労しました。最終的に、社協のOGにも協力を依頼し、6名の生活支援相談員（以下、相談員）を雇用することができました。

解決策を皆で共に考える
平時から企業や団体、住民等と連携を深める

相談員が訪問から戻った際には、その都度コーディネーターと話し合い、解決策を共に考えるよう努めました。また、地域福祉事業の職員や民生委員・児童委員にも協力を求め、NPOや他団体からも意見やアドバイスをいただきました。

被災者支援というと仮設住宅への対応が中心になりがちですが、対象を限定せず、地域全体を視野に入れて支援を行いました。また、県社協が主催する情報共有会議にも積極的に参加し、自分たちの支援が地域の実情に即しているかを確認できた点は非常に有意義でした。

大規模な災害時には、社協だけでは対応が難しいのが現実です。そのため、平時から地元企業や団体、地域住民との連携を深めることが重要です。絆を築く活動に期限を設ける必要はありません。一歩ずつ、時間をかけて人と人を結びつけていくことが大切だと考えています。



生活支援相談員の訪問の様子

インフォメーション 社協が把握するボランティア数は652万8,163人

～ボランティア活動者数調査結果がまとまる～

全国社会福祉協議会 全国ボランティア・市民活動振興センターでは、毎年「ボランティア活動者数調査」を実施しています。全国の都道府県・指定都市、市区町村社協への調査の結果、2024年4月1日時点で全国の社会福祉協議会が把握するボランティア活動者数は652万8,163人となり、前年に比べて増加

しています。調査結果は、以下の2ページにて公表していますのでご参照ください。

URL ① : <https://www.zcwwc.net/volunteer/reference/zenshakyo-vc/>

URL ② : <https://www.saigaivc.com/earthquake/311/>